

かたがたのもの、^夫ふ二人をもつてをくりたびて候。その心ざし弁殿の御ふみに申すげに候。さてはなによりも御ために第一の大事を申し候なり。

正法像法の時は世もいまだを^衰とろへず、聖人・賢人もつゞき生まれ候ひき。天も人を^守まぼり給ひき。末法になり候へば、人の^貪とんよくやうやくすぎ候ひて、主と臣と親と子と兄と弟と^{じょうろん}論ひまなし。まして他人は申すに及ばず。これによりて天もその国をすつれば、三災七難乃至一二三四五六七の日いでて、草木かれうせ、小大河もつき、大地は^炭すみのごとくをこり、大海は^油あぶらのごとくになり、けっくは無間地獄より炎いでて上梵天まで^{ぼんてん}火炎充滿すべし。これていの事いでんとて、やうやく世間は^衰をとろへ候なり。

皆人のをもひて候は、父には子したがひ、臣は君にかなひ、弟子は師に^違あすべからずと云云。かしこき人もいやしき者もしれる事なり。しかれども^{とんよく}貪欲・^{しんに}瞋恚・^{ぐち}愚癡と申す^酒さけに^酔ゑひて、主に敵し、親を^侮かろしめ、師を^侮あなづる、つねにみへて候。但師と主と親とに^{いさ}随ひてあしき事を^{いさ}諫めば孝養となる事は、さきの御ふみにかきつけて候ひしかば、つねに御らむあるべし。

たゞしこのたび^{右衛門}ゑもん^{さかん}の志^殿どのかさねて親のか^勘だうあり。とのゝ御前にこれにて申せしがごとく、一定^{兵衛}か^衛だうあるべし、ひやうへの志^殿を^{御前}ぼつかなし、^得ごせんかまへて御心^殿へあるべしと申して候ひしなり。今度は^殿とのは一定を^落ち給ひぬとを^覚ぼうるなり。を^得ち給はんをいかにと申す事はゆめゆめ候はず。但地獄にて日蓮をうらみ給ふ事なかれ。しり候まじきなり。千年の^苧かるかやも一時には^灰ひとなる。百年の功も一言にやぶれ候は法の^理ことわりなり。さゑもんの大夫殿は今度法華經のかたきになり^定さだまり給ふとみへて候。ゑもんのたいうの志^殿は今度法華經の行者になり候はんずらん。とのは現前の^{はか}計らひなれば親につき給はんずらむ。ものぐるわしき人々はこれをほめ候べし。宗盛が親父入道の悪事に^{篠原}随ひてしのわらにて^{しげもり}頸を切られし、^{重盛}が随はずして先に死せし、いづれか親の孝人なる。法華經のかたきになる親に^捨随ひて、一乗の行者なる兄を^捨すてば、親の孝養となりなんや。せんずるところ、ひと^思ずちにをもひ^思切って、兄と同じく仏道をなり給へ。親父は^{みょうしょうごんのう}妙莊嚴王のごとし、兄弟は^{浄蔵}・^{浄眼}なるべし。昔と今はかわるとも、法華經のことわり^違たがうべからず。

当ても武蔵の入道そこばくの所領所従等を^{とんせい}すてゝ^{和殿}遁世あり。まして^僅わどの^僅ばらがわづ

かの事をへつらひて、心うすくて悪道に堕ちて日蓮うらみさせ給ふな。かへすがへす今
度^殿との^は墮つべしとをぼうるなり。此程の心ざしありつるが、ひきかへて悪道に墮ち給
はん事^不が^便ふびんなれば申すなり。百に一つ、千に一つも日蓮が義^付につかんとをぼさば、
親に向かつていゝ切り給へ。親なればいかにも^{したが}順^ひまいらせ候べきが、法華經の御か
たきになり給へば、つきまいらせては不孝の身となりぬべく候へば、^捨すてまいらせて兄
につき候なり。兄にすてられ候わば兄と一同とをぼすべしと申し切り給へ。すこしもを
そるゝ心なかれ。

過去遠々劫より法華經を信ぜしかども、仏にならぬ事これなり。しをの^潮ひると^干みつと、
月の出づるといると、夏と秋と、冬と春とのさかひには必ず相違する事あり。凡夫の仏
になる又かくのごとし。必ず三障四魔と申す障^さり^わりいできたれば、賢者はよろこび、愚者
は退くこれなり。此の事は^態わざとも申し、又^便びん^意ぎにとをもひつるに、御使ひにありが
たし。墮ち給ふならばよもこの御使ひはあらじとをもひ候へば、もしやと申すなり。

仏になり候事は此の須弥山^{しゅみせん}にはりをたてゝ彼の須弥山^針よりいとをはなちて、そのいと
の^直すぐ^渡に^穴わたり^況て、^逆はりのあな^難に入^るよりもかたし。いわうやさかさまに大風のふきむ
かへたらんは、いよいよかたき事ぞかし。經に云はく「億々万劫より不可議に至って、
時^{いま}に乃し是の法華經を聞くことを得。億々万劫より不可議に至って、諸仏世尊時に是の
經を説きたまふ。是の故に行者仏の滅後に於て是くの如き經を聞いて疑惑を生ずること
な^か勿^れ」等云云。此の經文は法華經二十八品の中にことにめづらし。序品より法師品にい
たるまでは等覺已下人天・四衆・八部^ぶその^数かずありしかども、仏は但釈迦如来一仏なり。
重^軽くて^{ほうとうほん}かる^{ぞく}きへん^{るいほん}もあり。宝塔品より囑累品にいたるまでの十二品は殊に重きが中の重
きなり。其の故は釈迦仏の御前に多宝の宝塔^{ゆげん}涌現せり。月の前に日の出でたるがごとし。
又十方の諸仏は樹下に御はします。十方世界の草木の上に火をともしせるがごとし。此の
御前^選にてせんせられたる文なり。

涅槃經に云はく「昔^{むしゆ}無^{このかた}数^の無^{かた}量^の劫^のより^こ来^の常^にに^苦悩^{を受}く。一々の衆生一劫の中に積む
所の身の骨は王舎城の毘富羅^{びふら}山の如く、飲む所の乳汁^{ちち}は四海の水の如く、身より出だす
所の血は四海の水よりも多く、父母兄弟妻子眷属の命終^{こくぎゆう}に^な涙^み泣^くして出だす所の^な目^み涙^なは
四大海より多く、地の草木を尽して四寸^{かずとり}の^も籌^ふとなし、以て父母を数ふるも亦^{また}尽^{あた}すこと能
はじ」云云。此の經文は仏最後に双林の本に臥^{もと}して^ふかたり給ひし御言なり。もつとも心
をと^{このかた}むべし。無量劫より^こ已^の来^の生^のむ^のところの父母は、十方世界の大地の草木を四寸に切
りて、^充あて^算か^値ぞうとも、たるべからずと申す經文なり。此等の父母にはあひしかども、

法華經にはいまだあわず。されば父母はまうけやすし、法華經はあひがたし。今度あひやすき父母のことばをそむきて、あひがたき法華經のともにはなれずば、我が身仏になるのみならず、そむきしをやをもみちびきなん。例せば悉達太子は浄飯王の嫡子なり。国をもゆづり位にもつけんとをぼして、すでに御位につけまいらせたりしを、御心をやぶりて夜中城をにげ出でさせ給ひしかば、不孝の者なりとうらみさせ給ひしかども、仏にならせ給ひてはまづ浄飯王・摩耶夫人をこそみちびかせ給ひしか。をやというをやの世をすてゝ仏になれと申すをやは一人もなきなり。

これはとによせかくによせて、わどのばらを持斎・念仏者等がつくりをとさんために、をやをすゝめをとすなり。両火房は百万反の念仏をすゝめて人々の内をせきて、法華經のたねをたゝんとはかるときくなり。極楽寺殿はいみじかりし人ぞかし。念仏者等にたぼらかされて日蓮をあだませ給ひしかば、我が身といふ其の一門皆ほろびさせ給ふ。たゞいまはへちこの守殿一人計りなり。両火房を御信用ある人はいみじきと御らむあるか。なごへの一門の善覚寺・長樂寺・大仏殿立てさせ給ひて其の一門のならせ給ふ事をみよ。又守殿は日本国の主にてをはするが、一閻浮提のごとくなるかたきをへさせ給へり。

わどの兄をすてゝあにがあとをゆづられたりとも、千万年のさかへかたかるべし。しらず、又わづかの程にや。いかんが此のよならんずらん。よくよくをもひ切って、一向に後世をたのまるべし。かう申すとも、いたづらのふみなるべしとをもへば、かくもものうけれども、のちのをもひでにしるし申すなり。恐々謹言。

十一月二十日

日 蓮 花 押

兵衛志殿御返事